

かわさき 図書館だより



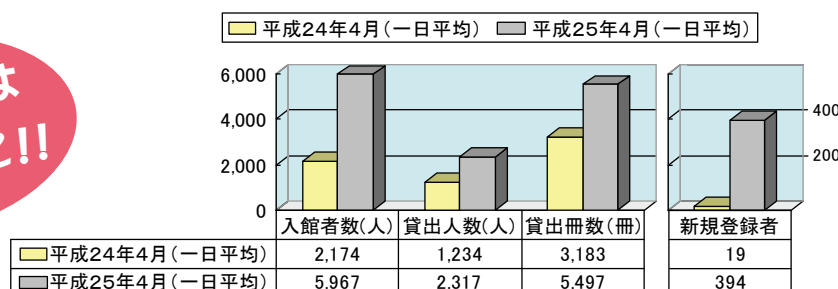
図書館ホームページ: <http://www.library.city.kawasaki.jp/>

中原図書館のいま・むかし

中原図書館が新しくなり2ヶ月が経ちました。オープンから毎日たくさんの方にご利用いただいております。多いときは1日に1万人以上の来館者があるなど、地域の皆様にとっても注目をいただいています。

そこで今回は、新しい中原図書館の利用状況を1年前と比べてみました。

入館者数は
約2.7倍に!!



昨年4月の入館者数の一日平均は2,174人でしたが、新中原図書館では、約2.7倍の5,967人になりました。貸出人数については約1.9倍、貸出冊数も約1.7倍の利用となっています。さらに、新規登録者数では、オープン後1ヶ月間で11,000人以上の新規登録者があり、一日平均では昨年度の約21倍となりました。

旧中原図書館と新しい中原図書館で大きく変わったことは、平日の開館時間を2時間延長したこと、自動貸出機などICTの活用、開架スペースが広がったことです。以前の中原図書館では、約6割の資料が書庫にしまわれていましたが、現在は6割以上の資料を開架スペースに置くことができるようになりました。開館時間の延長と自由に見られる資料が増えたことで、本を手に取りやすくなり利用が増えたのではないかと思います。今後も、どうぞ川崎市立図書館をご利用ください。

古い資料をひもとくと...

旧中原図書館の本館がオープンした昭和49年当時の様子を、昭和50年3月発行の「中原図書館だより」にみることができました。当時は新館オープンをきっかけに利用が飛躍的に伸びていたようです。一部をご紹介します。

《 一略一 7月14日新館がオープンされると、貸出冊数も1日1,000冊を超える日が続いた。これは新館に移ってからの利用しやすさによるものであるが、その後も引き続いて前年同時期の2倍程度の利用冊数があり、ことに児童の利用増加はめざましいものがある。 一略一 》



あとうだ

中原図書館開館記念

阿刀田高講演会 —読書はおいしいぞ—



中原図書館の開館を記念して、作家の阿刀田高氏による講演会を開催いたします。阿刀田氏は、国立国会図書館に勤務しながら執筆活動を続け、1979年に直木賞、2009年には旭日中綬賞を受賞したほか、昨年4月からは、山梨県立図書館長に就任されました。幅広い活動を展開されている阿刀田氏のお話を、ぜひ聞いてみませんか。読書がもっと楽しくなること間違いなしです。

- 日時** 平成25年6月29日(土) 14時~16時
- 場所** 川崎市立中原図書館 6階 多目的室
(JR南武線・東急東横線「武蔵小杉駅」下車徒歩1分)
- 対象** 関心のある方はどなたでも
- 定員** 100名

- 申込み** 往復ハガキに参加希望者全員(2名まで)の氏名、住所を記入のうえ、次の住所まで。
〒211-0063 川崎市中原区小杉町3-1301
中原図書館 あて
- 締切** 平成25年6月18日(火) 必着
※定員を超えた場合は抽選となります。

かわさき車窓物語

このコーナーでは、3号に1回のペースで「川崎市内の乗り物・交通機関」をキーワードに様々な話題を取り上げてご紹介していく予定です。第2回は、東急東横線の武蔵小杉駅を取り上げました。

第2回 「工業都市」から「広域拠点」へ～武蔵小杉駅

川崎フロンターレの応援歌が発車メロディーとして流れる東急東横線の武蔵小杉駅。大正15年の開通時に駅はなく、昭和14年に、現在の駅から元住吉寄りに200メートル離れたところに、工業都市駅が作られました（昭和28年廃止）。武蔵小杉の駅名は南武線の前身の南武鉄道の時代から使われていますが、場所は今より武蔵中原寄りの、現在中原区役所がある辺りでした。現在の武蔵小杉駅の場所には当初は「グラウンド前」という別の駅がありましたが、昭和19年に2つの駅を統合し、駅名を「武蔵小杉」としました。東横線に武蔵小杉駅ができ、南武線の乗換駅になったのは翌昭和20年。軍需産業の拡大に伴って、仮設の駅での開業。まさに、周辺は「工業都市」だったのです。その後、東急目黒線（平成12年）、JR横須賀線・湘南新宿ライン（平成22年）と乗入れ路線が増える一方、工場跡地に巨大ビル群が建つなど、新しい街づくりがはじまり、広い地域から人を集める「広域拠点」としてにぎわう街になりつつあります。

武蔵小杉～武蔵中原間には「御殿町」「陣屋町」などの地名があり、中原街道には鍵の手に屈曲した道筋が今も残るなど、街道筋の町として賑わった江戸時代の名残を今もみることができます。

武蔵小杉の地下には「武蔵野線（通称：武蔵野南線）」が走っています。貨物線のため停車駅は無く、見ることもできませんが、首都圏の貨物輸送の大きな役割を担っています。また、武蔵野線同様に停車はしませんが、横須賀線と平行して東海道新幹線も武蔵小杉を走っています。

時代が移り周辺の様子が変わっても武蔵小杉周辺は常に「交通の要所」であり続けているのです。

第20回

We Love!
KAWASAKI

（このコーナーでは、川崎をもっとよく知り、もっと楽しむための本を紹介しています。）
今回は、「かわさき車窓物語」のテーマに合わせて、「武蔵小杉駅」や駅周辺に関する資料を集めました。

A：『東急の駅今昔・昭和の面影－80余年に存在した120駅を徹底紹介－』

宮田道一／著 JTBパブリッシング 2008.9

東急線全120駅を、駅ごとに昔の写真と出版当時の写真を並べて一冊にした本。沿線の様子や駅名の由来など、詳しく解説しています。「武蔵小杉駅」の初代・二代目、今は廃止された「工業都市駅」についても書かれています。



A

B：『南武線ものがたり』

東京新聞川崎版の連載記事

平成2年5月22日から平成2年12月21日まで東京新聞で掲載された「南武線ものがたり」全100回の連載記事です。南武線60年間（連載当時）の歴史を、大正編・昭和編・戦中編・戦後編の4編で紹介しています。「武蔵小杉駅」も多く取り上げられており、地元の方のお話なども交えながら、当時の状況が臨場感ある文章で綴られています。

C：『写真で綴る中原街道と周辺の今昔～多摩川から南武線まで～』

羽田猛／著 2009.3

中原街道は、江戸と駿府（静岡）を結ぶ重要な路線で、東海道よりも古い道です。江戸虎ノ門から川崎の丸子、小杉、小田中などを經由して、平塚の中原で東海道に合流しています。この本では、等々力の移り変わりを中心に、小杉十字路、武蔵小杉駅と周辺、街道沿いの家並みなどを、主に昭和30～50年代に撮影された写真とともに解説しています。



D

D：『未来に伝えるなかはらの歩み－中原区区制40周年記念写真集－』

中原区区制40周年記念写真集編集委員会／編集 中原区役所 2012.3

多くの区民の方々からご提供いただいた約400枚の写真で、明治末期から現在までの中原の移り変わりをたどります。中原の魅力があふれる写真集です。



図書館の全館休館のお知らせ



川崎市立図書館では、図書館システム機器の入替え等を行うため、全図書館（分館・閲覧所を含みます）を臨時休館いたします。また、機器の入替え期間中は、図書館ホームページ及び音声自動応答システムも休止いたします。ご利用の皆様には、大変ご不便をおかけいたしますが、ご理解くださいますようお願いいたします。

休館期間：平成25年9月17日(火)～9月30日(月)

**主な内容：システム機器の入替え、
地区図書館への自動貸出機の導入**

中原図書館では、
貸出手続きの約7割が、
自動貸出機を使って
行われています。

休館中は

- * 貸出期間を延長いたします。
- * 図書館ホームページでの本の検索や予約、利用状況の確認なども出来ませんのでご注意ください。

フロンターレ選手が選ぶ「わたしの1冊」

我が街・川崎のJ1サッカークラブ「川崎フロンターレ」と図書館との合同企画です。
第12回は、稲本選手が選ぶ1冊を紹介します。



『道をひらく』

松下幸之助／著 【PHP研究所】1968年刊

《内容紹介》

パナソニック（旧松下電器産業）グループの創業者である松下幸之助氏による短編集。PHP研究所の機関誌「PHP」に連載された短文から121編を「運命を切りひらくために」「みずから決断を下すときに」「生きがいある人生のために」など11のテーマごとにまとめたものです。1968年の発行から200刷りを越すロングセラーです。



KAWASAKI
Frontale



*** 稲本選手より ***

自分は、本をじっくりと読まないタイプですが、松下幸之助さんの「道をひらく」は良かったです。プロサッカー選手としていろいろなチャレンジをしてきた中で、アドバイスをもらえた本です。自己啓発本ですが、一つ一つが印象的な言葉で短い文章になっているので読みやすく、自分の糧となったと同時に、本を読むなら『この類かな』と思った印象的な本です。

【MF20 稲本潤一選手】

日本だけではなく海外でのプレー経験も豊富なセントラルMF。1対1の強さ、ボールホルダーへの寄せの鋭さはJリーグでもトップクラスの迫力。鋭い戦術眼と強靱なフィジカルでピンチを摘み取りチャンスに変える。読書は、気分転換を兼ねて読むことが多い。雑誌やマンガも好きなので、家が本で埋まらないようによく書棚を整理しているとのこと。

川崎市の歩みと未来の展望 (4)

「川崎市史」刊行と成果について (2)

法政大学名誉教授

村上直

川崎市は昭和20年（1945）太平洋戦争の敗戦を経て、やがて、わが国の戦後復興と経済の高度成長によって、急速な市勢の伸長をみるようになりました。そして、昭和39年（1964）7月をもって、市制施行から満40周年を迎えることになったのです。そこで、これを記念する行事の一つとして、『川崎市史』を刊行する事業の方針が打出されました。それは、川崎市の人口が100万人に到達することも想定されたからです。かつての人口5万人の都市から、100万人の大都市への発展です。

「川崎市史」の編さん

昭和38年10月には、川崎市役所の総務部文書課が編さん事業を担当する事務局となり、39・40年の両年度を調査期間として編さん事業を行うことになりました。資料調査は、市内外の諸官庁や民間企業、民間団体、図書館、大学の研究機関、そして、個人を対象とする資料の所在調査を行いながら実施していきました。このような市内外の広範な調査にもかかわらず、市内の旧家や寺社の所蔵文書の散逸もみられ困難が伴ったといわれます。しかし、こうしたなかで貴重な資料が地方文書を中心に残っていたのです。その所蔵者は市内では、平川四郎、原全三、井出喜三郎、内藤信義、鹿島庄平、田辺大上、田口房太郎、原平八、和田ミツヨ、山本国義、永塚源蔵、安藤平作、永塚酉蔵、小林英男、小泉宗一、高橋茂、上田安左衛門、井田太郎、井田裕進、志村文雄、三富寿夫、梶環三、鈴木達也、佐保田和之、飯塚重信の25名。それに日枝神社（山王社）、大楽寺、泉沢寺、宗隆寺、宗三寺の寺社。市外では、添田茂樹、吉浜俊彦、平川幾次郎の3名の方々があげられています。この他に、東京教育大学（現筑波大学）所蔵の田村家文書（旧梶ヶ谷村）。慶応義塾大学の旧木月村や旧塚越村関係の文書などもあります。これらの資料は

主として、明治期（近代）以前のもものが中心ですが、現在では、旧家などを知るための貴重な手がかりになっています。

「川崎市史」の構成と執筆者

昭和40年（1965）12月になりますと、いよいよ市史の執筆を進めていくために、執筆者が決められています。この『川崎市史』の編さんの目的につきましては、金刺不二太郎市長のもとで、川崎市域について、原始社会から始めて、一万年に及ぶ歴史の歩みを有機的にとらえ概観していこうとするものですが、特に、明治の末期以降から記述が詳細になります。それは川崎市が近代工業を受け入れ始めてから、大きく繁栄していく基盤ができ上っていったとみるからです。

川崎市域の歴史は四編から構成しています。第一編は「先史時代から明治末期まで」、第二編は「明治期末・大正初期から大正13年の市制施行ごろまで」、第三編は「市制施行から昭和20年の終戦まで」、第四編は「終戦から昭和40年前後まで」です。そして、その執筆を進めていくために、時代区分を配慮して9名の研究者が委嘱されることになりました。そのなかに、私も川崎市に在住していたことで第一編の「近世」（村上直）を担当することになり、はじめて『川崎市史』の編さん事業に参画することになりました。今になると、川崎市域の当時を振り返り、懐かしい思い出が多くあります。



『川崎市史』の扉（右）、「序」文（昭和43年10月）の市長署名（中）と奥付（左）

編集・発行 川崎市立中原図書館 〒211-0063 川崎市中原区小杉町3-1301 TEL044-722-4932

川崎市立図書館：

川崎図書館(200-7011) 高津図書館(822-2413) 麻生図書館(951-1305) 大師分館(266-3550) 橘分館(788-1531)
幸図書館(541-3915) 宮前図書館(888-3918) 田島分館(333-9120) 柿生分館(986-6470)
中原図書館(722-4932) 多摩図書館(935-3400) 日吉分館(587-1491) 菅覧所(946-3271)